

平成 26 年度 医療安全セミナー 『医療安全』

公益社団法人 日本放射線技術学会 近畿部会

学術委員会

「患者と医療チームの安全を支えるノンテクニカルスキル」

大阪大学医学部附属病院 中央クオリティマネジメント部

中島 和江

専門家のテクニカルスキルを補い、安全で効率的に職務を遂行できるような認知能力、社会能力、人的資源をうまく活用できる能力をノンテクニカルスキルと呼ぶ。これには状況認識、意思決定、チームワーク、コミュニケーション、リーダーシップ・フォロワーシップ、ストレス管理等が含まれる。人間の知覚、記憶、情報処理能力には限界があり、複雑系である医療現場ではエラーが起こりやすい。たとえ高度なテクニカルスキルを身につけていても、状況認識や意思決定を一つ誤れば、大きな事故につながりかねないことから、ノンテクニカルスキルは安全で質の高い医療を行うために不可欠である。具体的な方法として、患者さんや家族を含めた医療チームの構成員一人ひとりが、気づいたこと、懸念事項、提案等を声に出してチームのメンバーに伝えること（スピークアップ）や、互いに支援しあうこと（リーダーシップ・フォロアーシップ）などが有用である。

「医療安全への取り組み：中央サービス部門である麻酔科の視点から」

和歌山県立医科大学附属病院 医療安全推進部・麻酔科

水本 一弘

2010 年に厚生労働省が「チーム医療の推進に関する検討会」を立ち上げるなど近年になって、チーム医療が重要視されているが、手術室はずっと以前よりチーム医療を実践してきた。外科医、麻酔科医、看護師、薬剤師、診療放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師など多職種が一人の患者に同時進行で関わっている。多職種連携は医療の質を向上させるが、同時にエラーも発生しやすい。手術室で発生するエラーの約半数はコミュニケーションの齟齬によるとされている。

麻酔科は手術室内チーム医療における扇の要である。状況認識、意思決定してリーダーシップを発揮することが要求されることも多い。これらのノンテクニカルスキルを経験のみで研鑽することには限界がある。シミュレーション訓練などを通じた教育、学習が重要である。

医育機関では常に初心者、未経験者が存在する。これに起因するエラーでは、個人レベルでの努力や注意喚起の効果はほとんどない。教育やシステム改善による対応が重要である。

今回は、事例をまじえながら麻酔科の視点から医療安全への取り組みについてお話いただく。

「リーダーシップとリスクマネジメント」

公益社団法人 日本航空機操縦士協会

(元日本航空機長) 小林 宏之

「安全」とは、継続的に危険要素を認識して、リスクマネジメントを実行してゆくことにより、人的危害や財産等への被害のリスクを軽減し、例え、危害や被害が生じても、許容範囲に維持している状態をいいます。

私達人間が活動するうえで、リスクは必ず潜在し、あるいは実際に顕在化(発生)します。そのリスクに対する未然防止—被害局限対応—回復—再発防止の一連のマネジメントがリスクマネジメントです。

日常の業務において、リスクマネジメントを成果のあるものにするためには、リーダーシップが深く関わっています。

リーダーシップというと、組織、チームのリーダーだけが発揮すれば良いのだ、と捉えがちですが、リーダーシップの本質はリーダーだけのものではなく、チームの各人がそれぞれの専門、役割に応じてリーダーシップを発揮する責務があります。リーダーにはそれぞれが、役割に応じてリーダーシップを発揮できるようなチームを形成し維持する責任があります。今求められているリーダーシップは、このような役割遂行型リーダーシップです。

「新しい安全文化の考え方とレジリエントな安全マネジメント」

立教大学 現代心理学部心理学科

芳賀 繁

安全文化についてジェームズ・リーズンが 4 つの構成要素(報告する文化, 公正な文化, 柔軟な文化, 学習する文化)をあげたことはよく知られているが, 柔軟な文化がなぜ必要なのかについては十分な理解が得られてこなかったように思われる. 柔軟な文化は緊急時における現場第一線への権限委譲, トップダウン型からボトムアップ型意思決定への変更などを特徴とするが, これは, 2005 年頃からヒューマンファクターズの新しいパラダイムとして注目されだしたレジリエンス・エンジニアリング(RE)の考え方に通じるものがある. 本講演では, RE の基本的理念を解説し, 失敗を防ぐことにのみ注力するのではなく, 成功を増やすことを目指した安全マネジメントのあり方を提案する.

「医療情報が果たす役割」

大阪府立成人病センター 放射線診断科 兼 医療情報部

川真田 実

多くの病院ではシステム化により HIS, RIS, PACS, モダリティ間予約, 会計情報連携がスムーズとなり, 医療従事者にとっての医療行為以外にとられていた時間を削減することが可能となっている. さらに, 医療従事者間で正確な情報の共有が可能となりデータの効率的な有効活用が図られたことで, 医療機関における診療の質や医療サービスが向上し, 医療安全に対する意識や関心が非常に高まりつつある. しかし, システム導入時やインシデントが発生した際にシステムの仕様を変更する場合, システム的な概念を十分に考慮されていないのが現状である. 本講演では医療安全において医療情報がどのような役割を果たしていくべきなのか, 医療安全を担保するために如何に情報をコントロールすべきなのかを紹介する.